

# 保育園3歳クラス女児ミホの幼児と保育者とのかかわり

丸 山 良 平\*

(平成20年9月29日受付；平成20年10月23日受理)

## 要 旨

本研究の目的は保育園3歳クラスに通園するミホが遊びと生活の中でクラスメートとかかわっている実態と、ミホに対する保育者のかかわりを明らかにすることである。

対象者は新潟市の一保育園に就園するミホ、そしてミホとかかわるクラスメート、及び保育者である。3歳クラス期の2007年8月から2008年3月までの8ヵ月間にわたり合計14回の参加観察を行い資料を収集した。この資料から作成した事例を分析し、3歳クラス期のミホの遊びの様子や他児とのかかわり、保育者とのかかわりの実態を示して考察した。

## KEY WORDS

Care and Education

保育援助

Interaction

相互交渉

Peer Relationship

仲間関係

Human Relations

人間関係

## 問題と目的

本研究の目的は、保育園3歳クラスに通園している女児ミホに焦点を当て、ミホと他児とのかかわり、及び保育者とのかかわりの事例を分析し、その実態を考察することである。

筆者はミホとそのクラスメート、クラス担当保育者を対象に1歳クラス期から観察を継続している。これまでに1歳クラス期から3歳クラス期7月までのミホとクラスメート、保育者とのかかわりの実態とそれに関する考察を報告してきた(丸山, 2007; 丸山, 2008)。そこで示された各クラス期におけるミホのかかわりの実態は、整理すると以下のようにまとめられる。

1歳クラス期ではミホは一人遊びをしなかったし、保育者の援助がないと他児とも遊ばなかった。ミホは周囲の幼児から物を奪い、身体を叩くつねるなどの攻撃的なかかわりを多くしていた。2歳クラス期になると一転してミホの他児への攻撃的なかかわりは激減した。ミホは一人遊びや他児と平行遊びをするようになり、さらに他児とかかわって遊ぶようになっていた。

この事実から1歳クラス期ではミホは必要でもない物を他児から奪ったり、他児に意地悪したりしていたのは、したい遊びを見つけれず、そうしたかかわりをしたと推測した。それを保育者が叱ったり、注意したりする指導をミホは拒否する姿勢を示したが、そうすることで保育者のさらなるかかわりを引き出していた。ミホが他児に攻撃的なかかわりをし、それを保育者が叱ったり、注意したりすることは、ミホにはやることのない空白の時間を埋めるものであった。それは楽しくない生活への苛立ちを表現したものとも考えた。そうであるならば、ミホの攻撃的なかかわりを減少させるには、それを叱るのではなく、保育者が遊びを提案し、遊びをリードしてクラスの幼児が遊べるような指導が必要と推測した。

3歳クラス期ではミホは他児を気遣う言動をし始め、1歳クラス期からクラスメートである2人の女児マオとサチヨとのかかわりを意識的に求めるようになった。そのミホをマオは受け入れるものの、サチヨは拒否していた。サチヨはミホに反発し、嫌っているようであった。サチヨがミホの持っている物を欲しいと言ってもミホは譲らないし、それを奪おうとすれば強く抵抗するなど、ミホはサチヨの自分勝手な行動を認めず、不服を言うなどいざこざの相手になる場合が多かった。さらにマオはサチヨのそうした面を受け入れて一緒に遊ぶので、サチヨにとってミホは嫌な幼児に映り、それで嫌っていたと推測できた。

2歳クラス期と3歳クラス期では、ミホは周囲の幼児と保育者の様子をよく観察していた。それは他児が何をどのようにして遊んでいるかに興味があったことによる。さらに保育者が他児のいざこざを仲裁する場面では他児に同情し、さらに保育者の説明をよく聞き、どうすべきかを学んでいたようである。また保育者が手遊びや遊戯をリードす

る場面では一緒にしないが、一人遊びではその内容をやっていた。記憶しているが保育者の前ではしないのである。その一方、ミホは片付けのときになると、他児が出した玩具等も片付けようとしていた。その様子から保育者に認めて欲しいという気持ちが強いと推測できた。保育者の評価、それが反映する他児からの評価を気にしていたのである。こうした状況を考慮して、ミホが保育者のリードでクラスメートと一緒に手遊びなどをしないのは、周囲に上手と認められる自信がないからと推測した。

以上がミホの3歳クラス期7月までの様子である。それ以降ミホはクラスの幼児、特にマオとサチヨとどのようにかかわって遊び、生活していくのであろうか。またこの保育園では3歳クラス以上になると、保育者がリードして保育を進める一斉指導の時間がほぼ毎日設けられている。そうしたときの活動にミホはどのように参加していくのであろうか。

そこで本研究では観察した資料から事例を作成し、それを分析してミホと他児、保育者とのかかわりの実態を明らかにする。なお本研究では幼児名は仮名で記述し、各保育者には記号を付け個人識別できるようにした。その幼児の仮名と保育者の記号は前回の報告（丸山，2008）と一致させてある。

## 方 法

**対象者** 新潟市内私立保育園3歳クラスに通園する女児ミホ、ミホとかかわった幼児と保育者である。3歳クラスの幼児は28人、クラス担当保育者はJ、K、L（Lが特別支援を要する幼児への加配）の3人である。

**観察日時とクラスの日課** 観察は8月31日、9月28日、10月5日・12日、11月2日、1月11日・18日・25日、2月1日・8日・15日・22日、3月3日・14日の合計14回である。観察時間は朝8：30から昼食開始までの約3時間である。

3歳クラスの午前中の基本的な日課は8：30から8：45に登園し、保育室で身支度を整えてから遊戯室で4、5歳クラス児と一緒に自発活動としての遊びをして過ごす。9：30に片付けをして排泄する。この8：30から9：30までの自発活動の時間は保育者2人が指導・援助するが、全ての保育者が順番に担当する。9：40から10：00は保育室で朝の会として保育者が視診し出席を確認したり話をしたりする。10：00から11：30の昼食開始までは、日によって異なるが、保育者が提案して一斉指導をしたり、自発的な活動をしたり、園外保育に出たりする保育者主導の時間である。

**観察方法** 参加観察を行い、幼児に話しかけられれば応じ、保育者不在で幼児に困難が生じたとき（例えば、身体攻撃を繰り返し受けるなど）には援助した。DVD撮影とメモ書きにより資料を収集した。なお観察の後、クラス担当保育者、園長、副園長と話し合い、幼児の家庭状況や注目すべき出来事などの情報を提供してもらい、分析と考察がより確実にできるように留意した。

**分析方法** ミホと他児、保育者とかかわった場面を抽出して事例を作成した。ミホがかかわった相手、ミホにかかわった幼児、かかわりの方法（行為、会話、視線、表情）と内容、保育者とかかわりの方法と内容に注目して事例化した。

幼児同士のかかわりの性質として親和、中立、攻撃の3カテゴリーに分類した。親和とは好意を示し意図的に一緒に遊ぶなどの友好的なかかわりである。攻撃とは言葉で非難したり、物を奪ったり、身体攻撃をしたりする敵対的なかかわりである。中立とは親和でも攻撃でもないかかわりで、感情的には不服であってもそれを言葉や行為で表現しないかかわりを含む。

親和はその内容により8項目の下位カテゴリー、分与（物を分け与える）・抱擁（相手の体を優しく抱く）・ユーモア（おもしろいことを言う）・会話（親しく話し合う）・共用（場や物を一緒に使う）・同調（相手と同じことをする）・連合（連合遊び）・協同（協同遊び）に分類した。中立はその内容により9項目の下位カテゴリー、受容（相手の主張を受け入れる）・接近（相手の側に寄る）・平行（平行遊び）・発言（提案や説明をする）・傍観（直接関与しないが注視する）・クラス活動（保育者の一斉指導で活動する）・拒否（相手のかかわりを拒否する）・注意（相手を言葉で注意する）・要求（相手に要求する）に分類した。攻撃はその内容により5項目の下位カテゴリー、非難（相手を非難する）・物奪取（相手の持つ物を奪う）・場奪取（相手が使っている場所を奪う）・叩く（相手の身体を叩く）・威圧（相手を見下して威張る）に分類した。

保育者とかかわりはその内容により10項目のカテゴリー、気を引く（保育者に接触して気を引く）・援助要請（保育者に援助を求める）・話しかけ（保育者との会話）・遊び参加（自発活動の時間に保育者がリードする遊びに参加する）・助言受（保育者から助言を受ける）・手伝い（保育者の手伝いをする）・一斉指導（保育者主導の時間に一斉指導で活動する）・援助傍観（保育者の他児への助言・説明を側で観察する）・無視（保育者の働きかけに反応しない）・

叱責受（保育者から叱られる）に分類した。この項目の名称はすべてミホの立場から表現したものである。

上記したカテゴリーを用いて、事例で示されたミホと幼児のかかわり、保育者とのかかわりを分析し、その件数をカウントした。

## 結果と考察

得られた事例は102例（かかわった件数は108件）であった。そのうちミホと幼児のみがかかわった場面（他児との二者場面と呼ぶ）が48例（かかわった件数は53件）、ミホと他児と保育者とが相互にかかわった場面（他児と保育者との三者場面と呼ぶ）が40例（かかわった件数は41件）、ミホと保育者のみがかかわった場面（保育者との二者場面と呼ぶ）が14例（かかわった件数は14件）であった。まずミホと幼児のみがかかわった場面を分析し、次に保育者とかわった場面を分析する。

### ミホと他児とのかかわりの性質と内容

**かかわりの性質** ミホから他児にかかわった件数は45件であった。その際のミホのかかわりは親和が14件、中立が12件、攻撃が19件であった。他児からミホにかかわった件数は14件であった。その際他児のかかわりは親和が5件、中立が3件、攻撃が6件であった。ミホと他児の親和、中立、攻撃の比率を検定したが、有意差はなかった（ $\chi^2 = 0.18$ ,  $df = 2$ ）。かかわりを始める場合、ミホからでも他児からでも親和、中立、攻撃のいずれかに偏るのではなく、ほぼ同じ比率といえる。

それでは親和や攻撃などのかかわりを受けたら、幼児はどのように対応するのであろうか。そこでミホから他児に親和、中立、攻撃でかわった際、対応した他児の親和、中立、攻撃の件数をTable 1に示した。また他児がミホに親和、中立、攻撃でかわった際、対応したミホの親和、中立、攻撃の件数をTable 2に示した。どちらからかわったか区別できないものが35件あった。そこでのミホのかかわりはすべて中立であったが、他児のかかわりは親和が2件、中立が33件であった。

Table 1 ミホからかわった他児の対応（件数）

	他児の対応			計
	親和	中立	攻撃	
ミホから親和	10	3	1	14
ミホから中立	0	11	1	12
ミホから攻撃	0	11	8	19
計	10	25	10	45

Table 2 他児からかわったミホの対応（件数）

	ミホの対応			
	親和	中立	攻撃	計
他児から親和	1	3	1	5
他児から中立	0	1	2	3
他児から攻撃	0	3	3	6
計	1	7	6	14

Table 1をみるとミホから親和でかわった14件で他児の対応が親和であったのは10件、中立は3件、攻撃は1件である。中立でのかかわり12件に対して他児の対応が中立であったのは11件で、攻撃は1件であった。攻撃でのかかわり19件に他児の対応が中立であったのは11件で、攻撃は8件である。ミホの攻撃に対して他児が中立で対応するケースの多いことが分かる。またミホが親和と中立でかわっているのに、攻撃での対応が1件ずつあった。これは後で事例を示して具体的に検討する。

さて、Table 2をみると他児から親和でかわった5件でミホの対応が親和であったのは1件で、中立3件、攻撃1件である。ミホの対応が親和でないものが多い。また中立でのかかわり3件への対応の内、攻撃が2件であった。さらに攻撃でのかかわり6件への対応の内、攻撃が半数の3件で、他児に比べミホの対応は攻撃が多いことが分かる。

**ミホと他児とがかわった内容** それではミホと他児がかわった親和、中立、攻撃の下位カテゴリーの件数をみてみよう。それぞれの下位カテゴリーの件数をTable 3、Table 4、Table 5に示した。

Table 3をみると親和においては会話、協同、連合、ユーモアの多いことが分かる。これらは親しいから行えるかわりである。次いで分与、抱擁が多い。こうしたかわりによって良好な関係を形成していくのであろう。Table 4をみると中立においては平行、傍観が多い。ある程度、距離をとって相手の行動を観察し、相手の状況を知ろうとしていることが分かる。接近がミホに多く、拒否が他児に多い。ミホは他児に興味を持つと近づいて側にいる傾向があるものの、他児はミホのかかわりを拒否する傾向があるといえよう。Table 5をみると攻撃においてはミホも他児も非難が最多であり、次いで物奪取が多い。他児はこの2カテゴリーだけであるが、ミホは場奪取と叩く、威圧を件数は少ないが行っていた。ミホの攻撃的なかわりは3歳クラス期においても他児より多いことが示された。



こうした事実を念頭において、ミホと他児とのかかわりの事例をみていこう。

Table 3 親和におけるかかわりの内容

	分与	抱擁	ユーモア	会話	共用	同調	連合	協同	合計
ミホ	1	2	3	3	1	0	2	3	15
他児	3	0	2	4	0	1	4	3	17

Table 4 中立におけるかかわりの内容

	受容	接近	平行	発言	傍観	クラス活動	拒否	注意	要求	合計
ミホ	3	7	12	4	12	11	4	0	1	54
他児	6	1	15	1	12	10	14	1	1	61

Table 5 攻撃におけるかかわりの内容

	非難	物奪取	場奪取	叩く	威圧	合計
ミホ	13	7	2	2	1	25
他児	10	6	0	0	0	16

#### ミホからのかかわりに対する他児の対応

**ミホからの親和でのかかわり** ミホが親和でかかわった相手はマオ、サチヨ、エミ、リナ、マリ、アキの6人であった。ミホのかかわりに対して親和で対応する場合が多かった。特にアキには3回ユーモアでかかわり、それに対してアキもおどけてユーモアで対応した。2人は顔を見合わせて笑い合い、アキはミホの行動を模倣していた。このように2人は気が合うことが多いようである。

ミホから親和でかかわったのに、攻撃で対応したのはマリであった。経緯は次のようであった。ミホが笑顔で、マリに背後から抱きつき、マリを抱擁した。するとマリはミホの腕を振り解き、「やめてよね。ミホちゃんとは遊びたくないの」と叫んで離れる。するとミホが「なによ！」と大きな声で叫ぶ。マリは振り返り、嫌そうな表情をして行ってしまった。

ミホは好意を持って親しく接しようとしたのであるが、他の女兒と一緒に遊んでいたマリにとってあまりに突然であり、その行為を自分への攻撃と判断したようである。別の日の事例においてもミホはマリと一緒に遊ぶようとしてかかわるのであるが、マリが受け入れないことが何度かあった。またミホの方からマリの機嫌をとるように親しく話しかけたが、マリはそれを拒否したこともあった。マリがミホに親和でかかわったのは協同して遊んだ1件のみである。マリはこれまでにミホが他児に攻撃でかかわったり、いざこざをしているのを見ており、ミホを攻撃的で意地悪な幼児とっていて、接触をさけようとしていたと推測する。

**ミホからの中立でのかかわり** ミホが中立でかかわった相手はマオ、サチヨ、エミ、リナ、アキ、シオリの6人であった。マオ、サチヨ、エミ、リナはミホの発言や接近に対して中立の拒否で対応していた。ミホが相手の気持ちや活動の状況に関係なく、自分勝手な提案をするのでそれを拒否し、近く寄ってくるのも嫌がっていた。アキは平行遊びでかかわり、シオリはミホの発言に納得しないものの、それを受け入れる表情をしたが発言には従わなかった。

ミホから中立でかかわったのに、攻撃で対応したのはサチヨであった。経緯は次のようであった。サチヨがミホの通園鞆の中に菓子を見つけたので、ミホが自宅から間違えて持ってきたと説明する。するとサチヨは大声でミホを非難し、そして保育者Jに告げ口した。しかし保育者Jはミホを叱らずに、「間違えて持ってきたのだから鞆に入れて置けばよいし、サチヨちゃんは気にしなくてもよい」と説明した。サチヨはミホが保育者に叱られるのを期待したようであった。サチヨはミホと一緒に遊ぶが、ときどきミホに文句を言ったり、仲間外れにしたりしていた。またサチヨは、「マオが勝手に自分から離れて行って自分をのけ者にした」と大声で泣き叫び、保育者Kに訴えた例があった。保育者Kがサチヨに状況を説明していると、ミホは「マオちゃんは自分の好きな遊びをしていい。マオちゃんはサチヨちゃんのものではない。マオちゃんはみんなのマオちゃんだから」と保育者Kを見ながらサチヨに対して説明した。保育者Kがそれに同意すると、その様子をサチヨは不服そうに見ていた。ミホはマオと一緒に遊びたいものの、自己主張が強すぎてマオとうまく遊べない経験をしており、そうしたときに保育者から言われていた理想論を言葉に

したのであろう。さらにそう主張した自分をマオと保育者から評価してもらいたいとの期待があったと同時に、サチヨに対して自分が優位にいることを示そうとしたと推測する。このようにミホもサチヨもマオやリナと一緒に遊ぶために、しかたなく互いにかかわるものの、あまり好意を持っていないことが分かる。

**ミホからの攻撃でのかかわり** ミホが攻撃でかかわった主な相手はマオ、サチヨ、リナ、アキ、アミ、サヤ、ノドカの7人と5歳クラス女児4人であった。マオ、サチヨ、リナ、アキ、ノドカの5人はミホの物奪取と非難に対して、物奪取や非難で応じていた。この5人はそれぞれミホの強い態度を恐れずに、玩具を勝手に奪い取るのは悪いことで返すように強く主張したり、ミホから玩具を奪い返したりしていたのである。ミホはアキに対して攻撃でのかかわりの後、ミホの方からユーモアでかかわるとアキもユーモアで対応し、対立関係を解消していた。

またミホはマオ、サチヨ、アキ、アミに対して遊び方や玩具の使い方が間違っている等と文句を言って非難する場面がそれぞれ別々にあった。それに対して4人ともミホを不満そうな表情で見たものの、まったく取り合わず、相手にしなかった。ミホが他児の行動を干渉するのは、その幼児に興味があり一緒に遊びたいという意思表示の場合もあると推測できる。しかし、ミホの相手を非難する言い方では、それが適切な助言であったとしても、ミホを恐れなくて対抗できる幼児は反発し受け入れないのである。

そうしたミホの干渉を受け入れた幼児がいた。それはサヤであった。保育者Kの一斉指導で遊戯していたサヤの踊り方に、ミホがそんな動かし方は間違いだと言うと、サヤはうなづいた。しかしミホ自身は、まったく踊っていないし、具体的にどうするのかを示していない。サヤがうなづいて意見を受け入れるように振る舞ったのは、ミホのさらなる攻撃を逃れるためであろう。サヤはおとなしく、ミホには対抗できないのでそのように行動したと思われる。サヤも結局は、ミホを相手にしていないといえよう。

さてミホが5歳クラス女児に攻撃でかかわったのは、次の経緯であった。ミホは自発活動の時間に遊戯室で保育者Jから発泡プラスチック製の平たいブロックを分配するように依頼された。このブロックは半年ぶりに出されたもので幼児達は強い興味を示し、ミホに分けて欲しいと要求していた。ミホは他児がブロックに触るとすぐに取り上げ、さらにブロックを尻に敷いたり、抱きかかえたりして他児に渡そうとしない。マオ、サチヨをはじめ、5歳クラス女児達が独り占めはするいし、悪いことだと説明する。しかしミホは「今、ミホが使っているの。後で貸せる」と言って渡さない。5歳クラス女児達は「後で貸してね」と言って離れる。しばらくすると、ミホはマオとサチヨ、5歳クラス女児4人に向かって、「ブロックをたくさん持っていてすごいだらう。みんなは持っていないね」と威張って、馬鹿にした口調で言う。5歳クラス女児4人は呆れかえった表情をして離れ、遊び始める。マオとサチヨはミホの言葉に反応せずに黙ったまま2人で遊び始める。ミホはサチヨがいる場所に行き、「ここはミホが遊んでいたの」と言う。サチヨが「違うよ」と反論するので、ミホはサチヨを叩いて退かせる。サチヨとマオは黙ったまま無然とした表情でミホから離れた。

ミホは興味あるブロックを独占し、さらにそれを持っていることで他児を威圧した。周囲の誰からも拒否され相手にされなくなると、マオやサチヨの遊びを妨害して自分の存在を誇示したのである。

ミホは保育者Jからブロックの配布を依頼され、全部を渡されたが、他児に配布するのが惜しくなったようである。保育者Jはミホが幼児達にブロックをうまく分配して、周囲の幼児達に評価されると予想したのであろう。しかしミホにはできなかった。その結果、クラスメートからも5歳クラス児からも、自分勝手な嫌な子どもと思われてしまったのである。

### 他児からのかかわりに対するミホの対応

**他児からの親和でのかかわり** ミホに親和でかかわった幼児はマオ、エミ、リナ、サヤ、アキの5人であった。ミホが親和で対応したのは一例のみで、その経緯は次のようであった。ミホとマオと一緒に遊んでいると、そこへリナが来た。マオがリナに話しかけて遊びに誘う。そのときリナはミホに気を遣っている様子であったが、しばらくしてマオの隣で遊びはじめる。ミホはリナをすんなりと受け入れて一緒に遊びだした。ミホはマオが遊ぶのを承認したし、自分もマオと遊びたいのでリナを受け入れたのであろう。

ミホが中立で応じたのは、アキとサヤに対しての次の3例であった。アキがミホにブロックを差し出すとミホが黙って受け取り、他の場所に行ってしまった例である。このときミホはブロックに興味はないし、アキとも遊びたいと思っていなかったようである。次はサヤがミホにブロックを渡そうとしたが、ミホは受け取るのを拒否したのでサヤが渡すのを止めた例である。もう1つは、このしばらく後にサヤが同様にブロックを渡そうとしたが再度ミホが拒否した。するとサヤがミホの足下にブロックを置いた。ミホは直ぐにそのブロックを踏みつけ、さらに蹴った。サヤは困惑した表情でそこから離れていった、という例である。

サヤに対しては厳しい対応で、ミホはサヤを見下した態度であった。サヤには興味はないし、一緒に遊ぶ気もなく、

対等な相手とは思っていないことが分かる。

**他児からの中立でのかかわり** ミホに中立でかかわった幼児は5歳クラス男児とナナの2人であった。5歳クラス男児とのかかわりでは、ミホは男児が話しかけたのに全く反応せず一人遊びを続けた。ナナとのかかわりは2回あったが、どれも攻撃で対応していた。ミホがサチヨの側にいるのを見ていたナナが近づいて、サチヨに話しかけた。するとミホはナナに、遊んでもいないのに話しかけると非難した。また別の日にはナナがブロックを持ってミホに近づくと、ミホはそのブロックを手でたたき落として奪った。ミホは興味のない幼児がかかわってきた場合、無視したり、非難したり、物を奪ったりして、好意的にかかわらない場合の多いことが分かる。

**他児からの攻撃でのかかわり** ミホに攻撃でかかわった幼児はマオ、サチヨ、マリ、ダイ、4歳クラス男児の5人であった。中立で対応した3例をみてみよう。ダイはミホが使っていたブロックを奪ったが、ミホは黙ってそれを認めた。ダイは保育者Lが常に支援しなければならない発達遅滞があり、ミホはダイを特別な幼児として許したのであろう。他の2例はマオとサチヨとのかかわりで、どちらもミホを強く非難するものであった。サチヨの非難に対しては、ミホはまったく動じないで拒否し、自分のやりたいように押し切った。マオの非難に対しては黙って笑顔になって、マオの主張を受け入れたのである。

ミホが攻撃で対応した3例はすべて非難であった。ミホはサチヨがブロックを奪ったことに強く抗議したが、返してもらえず保育者Lに訴えた例である。他の2例は別々の場面でマリと4歳クラス男児がミホの態度が悪いと非難したものである。4歳男児に対しては「そんなことはない」と反論したものの、言葉が続かず止めてしまった。マリに対してはミホは「今はそういう問題じゃない。何も分かっていない」とマリの主張を聞き入れずに、大声で非難し返したのである。しかしその言葉は何の弁明にもなっておらず、単に強い口調で主張してその場を逃れようとしたようである。マリがその場を離れて終わった。

このようにミホは相手によって、対応を意図的にはっきりと変えていることが分かる。

### ミホと保育者とのかかわりの内容

ミホと保育者とのかかわりをカテゴリー分類した件数を、ミホと他児と保育者の三者が相互にかかわる三者場面と、ミホと保育者との二者場面に分けてTable 6に示した。内容で最も多いのが気を引くで19件、次いで一斉指導が10件、遊び参加が9件である。その他のカテゴリーは5件に満たない。各カテゴリーの典型的な例を示して検討する。

Table 6 ミホと保育者とかかわり（件数）

	三者場面	二者場面	計
気を引く	11	8	19
援助要請	1	3	4
話しかけ	1	1	2
遊び参加	9	0	9
助言受	2	0	2
手伝い	1	1	2
一斉指導	10	0	10
援助傍観	2	0	2
無視	0	1	1
叱責受	4	0	4
計	41	14	55

**遊び参加・気を引く・話しかけ** 朝の自発活動の時間は遊戯室で過ごす。ミホは保育者Jや保育者Kが遊びを提案していれば、必ずそれに参加して、保育者の側にいて話しかけたり、腕を抱きかかえたりしていた。そうすると保育者が働きかけ返していた。保育者と一緒に遊ぶのが楽しいと同時に、保育者が親しく好意的に接してくれるのが嬉しいからである。保育者J、Kが遊びをしていなければ、ミホは保育者の側に行き、例えば昨日、祭に行ったとかお店に買い物に行ったなどと話しかけたり、自宅で何をして遊んだかを説明したりして保育者の目が自分に向くようにしていた。保育者Lには側に行き、支援するダイに手のかからないときに、自分から膝にのって抱かれたり、甘えたりしていた。

**無視** 登園したミホに保育者Aが「おはようミホちゃん」と笑顔で話しかけたが、それを無視して何も答えず、



表情さえも変えなかった。その直後にマオと一緒に遊んでおり、体調が悪いとか不機嫌ではなかったようである。保育者Aはクラス担当ではなく、興味があまりなかったので無視したと推測する。ミホはクラス担当保育者に受け入れられ、甘えたり、認められたりすることに大きな喜びを感じていることが分かる。

**一斉指導・気を引く** 一斉指導時間において、保育者JとKが幼児数人を順番に個別に指導し、他の幼児は自由に粘土製作や描画をして自分の番が来るのを待っていることが何度かあった。そうしたとき、ミホは製作や描画をしては、特に保育者Jに見せに行った。保育者Jは個別指導をしながらもミホに対応し、上手くできたところを褒めていた。そうするとミホは席に戻って製作し、また見せに行った。これを何度も繰り返していた。ミホ以外ではそのようにした幼児は一人もいなかった。

また一斉指導における集団遊戯では、ミホは遊戯の曲目によって、やるときとやらないときがはっきりしていた。自信があるものは積極的に参加するが、少しでも自信がないと保育者JやKが促してもやらなかった。ミホは自分はやってもいないのにサヤの踊り方を非難していた。しかしそれを保育者JやKは気づかなかったので、まったく何の対応もしていなかった。

**叱責受** ミホはマオを叩いたり、リナブロックを奪ったり、持って行くことが禁止されている所へままごと道具を持っていったりして保育者JとKから叱られていた。ミホはクラス担当保育者の話を真剣に聞いて受け入れ、相手の幼児に謝ったり、ブロックを返したり、場所から移動したりしていた。このように保育者の指導に素直に従っていた。クラス担当保育者を信頼していることが分かる。

**援助要請** ミホは保育者Jに自分の荷物の片付けて欲しい、絵本を読んで欲しい等と依頼した。保育者Kには髪留めを付けて欲しいと依頼した。保育者Lにはサチヨが奪ったブロックを非難しても返してくれないので返すように言って欲しいと依頼した。このように自分ではできそうにないと判断すると直ぐに近くにいる保育者に援助を依頼していた。これも保育者を信頼している姿と判断できる。

**援助傍観** 保育者Jがマサヨとマオのいざごに介入して互いの主張を聞き説明していた。ミホは保育者Jの表情とその言葉、同時にマサヨとマオの反応と表情を真剣に見つめていた。もう1例はミホ自身が当事者となったもので、マサヨがミホの遊んでいた場所に入り込んだので、ミホが「ずるいよ、場所取らないで、あっち行って」と非難した。その2人のやりとりを聞いた保育者Jがマサヨに経緯を問うと「だってここで、このブロックで遊びたかったんだもん」と叫ぶ。保育者Jが落ち着いた口調でマサヨに話していると、マサヨは次第に落ち着いて受け答えをするようになる。ミホは2人の話し合いを側で真剣に観察していた。ミホはいざごを仲裁する保育者Jの話す内容から、保育者Jはどのように行動する幼児を期待しているのか、「よい子」の条件を知ろうとしていたと推測する。

**手伝い** 大型の絵本ラックの角4カ所に付いていたクッション材の全部が外れていた。それに気付いた保育者Kがクッション材を付けようとしていると、側でそれを見たミホは直ぐに「ミホがやる」と言って、クッション材を受け取り、角に付け始める。ミホはときどき保育者Kの様子を見て、真剣な表情で作業をしてやり遂げた。保育者Kが礼を言うと、ミホは満面の笑顔でうなずいた。もう1例は、保育者Jが収納庫から約半年ぶりに平たいブロックを出した。それに興味を示したミホが寄ってきたので、保育者Jが「これを使いたい人に分けるのを手伝ってくれる？」と頼むとミホは笑顔で「はい」と返事をした。しかし、ミホは他児に渡すのが惜しくて1つも分配しない。結局は独占してしまい、使いたい子ども達から反感を持たれていた。それを見ていた保育者Jは困った表情をしたものの、ミホに任せきったのである。

## 全体的考察

### ミホと他児とのかかわりの特徴

ミホの他児とのかかわりは親和と中立が多く、攻撃がわずかであった。その攻撃も言葉で相手を非難することが過半数を占め、相手を叩く身体攻撃はわずかであった。攻撃的かかわりの激減した2歳クラス期と比べても攻撃が少なく、特に身体攻撃はまれとなった。この事実からミホは順調に社会性を身につけてきているといえる。

ミホは相手の幼児によってかかわり方をはっきり変えていることが示された。具体的に個人名をあげて考察を進めよう。マオとマリ、アキに対してミホは状況によっては攻撃でかわることもあるものの、多くの場合、好意を示して、一緒に遊ぼうとしたり、自分の方から関係を取り繕おうとしたりしていた。

特にミホの方からマオを求めていたのは、マオはミホを受け入れ優しく接してくれるし、遊びのアイデアも豊富なので一緒に活動することが楽しいからであろう。このマオに対する態度は2歳クラス期と変わらず、3歳クラス期を通してマオと一緒に遊びたい、マオと友達になりたいとの気持ちがさらに強くなったように感じた。しかしマオの方は、ミホの自分勝手な要求や遊びの進め方、他児に対する意地悪な態度に反感を持つことがしばしばあり、一緒に

遊んではいるものの、ときどき反発し好意を持っていない様子をみせていた。

マリ、アキは共に3歳クラス期4月に入園してきた幼児である。マリは活動的で自分の気持ちや主張をはっきり言えるし、自分がやりたい遊びを一人でもやれる。ミホはそうしたマリに魅力を感じて、側にいて遊ぼうとしていたようである。しかしマリの方はミホを避けたり、ミホからの親和のかかわりに対して攻撃で対応するなど好意を持っていないことが推測された。ミホが自分勝手に自分の意見を強く主張し、それを通そうとするのが許せないようであった。それでもミホが機会ある毎に話しかけたり、遊ぼうとしたりするので、ときどきは一緒に遊ぶようになった。

アキはマリほどには自己主張をしないが、遊びのアイデアを出し、自分の好きな遊びを一人ですることができる。ミホが自分勝手な要求をしても、アキは受け入れることが多かった。ミホにとってアキは自分を受容してくれるし、ユーモアを共有できるクラスメートであり、一緒に遊べるので気の合う仲間と感じているようであった。アキにとってもミホはときどき自分勝手な主張をし過ぎて対立することはあるものの、一緒に遊んで楽しい仲間と感じているようであった。

サチヨとリナはマオとよく一緒に遊ぶので、そのためにマオと一緒に遊ぼうとするミホと必然的にかかわりを持ち、一緒に遊ぶことが多かった。まずサチヨであるが、サチヨもミホも他児が持っている玩具に興味を持てば奪い取り、それを正当化する主張をしたりする傾向があり、互いに相手を自分勝手な、嫌な面を持つ幼児と感じているようであった。また2人ともマオと一緒に遊びたがり、ときにはマオを独占したがることもあって、しばしば対立していた。互いにマオと遊びたい、マオと友達になりたいとの気持ちがあり、ライバル意識を持っているようであった。そのために2人とも相手をしばしば攻撃したのであろう。マオはいがみ合う2人を嫌だと感じたようであるが、それでもマオは2人を受容し、2人の関係が良くなるようにしばしば調整していた。そうした働きかけもあり、ときどきはサチヨとミホは協力して遊ぶことができたのである。

リナは温和しく、ミホを受容してときどき一緒に遊んでいた。リナの方から攻撃のかかわりをするのではなく、ミホがリナから物を奪ったときリナは泣いて抗議したり奪い返そうとしたりするが、叩くなどの強い攻撃をすることはなかった。リナは自分で好きな遊びを進められるので、ミホは一人でつまらないときにリナの遊びに参加したり、物を奪ったりできるなど都合の良い相手のようであった。

エミ、ノドカはミホに積極的にかかわらないし、ミホが興味を引く活動をほとんどしなかったもので、協力して一緒に遊ぶことはなかった。エミは1歳クラス期からのクラスメートで、他児を攻撃することはほとんどないものの月齢が高く身体も大きいので、ミホはこれまでの経験を通して自分が対抗できる相手ではないと分かっている攻撃しなかったと推測する。ノドカは温和しいが、ミホの攻撃には諦めずに執念深く反撃していた。ミホはノドカのしつこい反撃を不快に感じて、あまり攻撃しなくなっていたと推測する。

シオンとサヤ、アミ、ナナの4人は共通して身体が小さく、ミホに対して自分の意見を主張することはまったくなかった。ミホが自分勝手な主張したり攻撃したりしても、3人は反論したり反撃したりせず従っていた。それでミホは4人を自分より弱い幼児と判断し見下すような態度を取り、安心してそのうちの誰かに関係のない怒りや不満を向けて攻撃したり、相手からのかかわりを無視したりしていたのであろう。

### ミホと保育者とのかかわりの特徴

ミホはクラス担当の3人の保育者に機会があれば、身体接触をしたり、自分がつくった物を見せたり、保育者の気を引くような行動や発言をしたりする様子が頻繁にみられた。ミホは保育者が自分に注目するとそれにより自分が認められたと思い非常に嬉しく感じていることが分かる。さらに身体接触を求めてミホは自分から保育者に背負われたり、抱きかかえられたりするようにしていた。保育者に甘えたい欲求も強いと分かる。

またミホは困ったことが起きれば、言葉で保育者に援助を依頼していたし、保育者から叱責や注意を受ければ、反論せずに素直に受け入れていた。保育者を深く信頼していたことが分かる。

保育者が他児のいざこざを仲裁する様子をミホは側で真剣に観察していた。いざこざを終結するやり方を知ろうとした同時に、保育者がいう「よい子」とはどのような行動をすることなのかを言葉で聞いて、理想モデルとして記憶しようとしていたのであろう。だからサチヨとマオのいざこざで、マオの行為を正当化するような「マオちゃんは自分の好きな遊びをしていい。マオちゃんはサチヨちゃんのものではない。マオちゃんはみんなのマオちゃんだから」と発言できたと考える。

ミホは自発活動時間では保育者が提案する集団での遊びに参加していた。ときどきそれから抜けて自分の興味ある活動をしては、また集団の遊びに戻って活動していた。集団での遊びに参加することで、遊びのルールを覚えるし、他児とのかかわりを経験できるので、遊びのレパートリーが広がる。それはもちろん、保育者と一緒に遊ぶことが楽しいからでもある。自発活動の時間でも保育者が遊びを提案する意味は大きいといえよう。



一斉指導の時間では集団遊戯が行われていた。ミホは曲目によって踊ったり、保育者に促されても踊らなかったりした。こうした傾向は2歳クラス期にもみられた。自分が上手くできない様子、失敗する様子を保育者に見られたくないようである。これは保育者に認められたい姿であるが自意識過剰ともいえよう。ミホは2歳クラス期では保育者がリードしてクラス全員で行う手遊びさえもやらなかった。それに比べれば、かなり進歩したといえるが、この自意識過剰への対応を考える必要がある。

### 教育実践への提言

ミホは遊びのアイデアが豊かで、興味深い遊びをする幼児と一緒に活動しようと側に寄ったり、話しかけたり、親切にしたりする反面、自己主張をしない幼児に対しては理不尽に非難をしたり、相手の働きかけを無視したりと厳しい対応をしていた。そうした様子をクラスメートは見ている、自分勝手なかわり方をするミホを嫌い、ミホを避けようとする姿がしばしば見られた。またクラスメートの多くがミホの親切や思いやりの行動にはたくらみがあると見透かし、その人柄にうんざりしていたように感じた。しかしミホはそれに気づいていなかった。ミホがこれに気づいて、自分より弱いと思う幼児にも対等にかかわらなければ、互いに思いやるような仲間関係は生まれないし、第三者の立場にある幼児でさえミホを心から信頼しはしないであろう。保育者は具体的な場面を見つけては、言葉を添えてミホが気づくように指導する必要がある。

保育者Jがミホに平たいブロックの分配を依頼したのは、これまでの様子から分配できると予想し、実際にできるかどうかを確認する機会であったのであろう。しかしその予想に反した結果となった。それでも保育者が介入しなかったのは、周囲の幼児達がどのように言葉で要求を伝え、それをミホがどのように受けとめるかを知ろうとしたのであろう。それも上手くはいかずに、ミホは周囲の幼児達から相手にされなかった。ミホは独り占めした満足と周囲の幼児達から相手にされない空虚感を共に体験したはずである。こうした体験は必要であるが、それで終わらせては不十分である。それをより意味のある経験にするには、ミホも周囲の幼児も楽しく遊べないこのように状況にどうしてなったのかという経緯、そして周囲の幼児の心情とミホの心情を、保育者が言葉にしてミホに伝えるべきであったと考える。そうした援助によって確実に記憶にとどめ、相手の心情を考え、さらに遊びの展開を予想できるようになるからである。

さてミホの自意識過剰であるが、これは本当の自分をさらけ出すのが不安だからである。保育者はミホに過剰な期待をしていないのに、なぜこのようになってしまったのであろうか。汐見（1997）は不必要に褒めたり、大げさに褒めたりすること続けていると、子どもの自己肯定感を弱めてしまい、人の評価に敏感な子どもになってしまう、と述べている。さらにこの褒めるやり方は日本中に蔓延しているとも言っている。確かに今日の保育実践では褒めることで幼児の自発的活動を促していこうとする傾向が確かにある。それが行き過ぎてしまった結果、幼児が保育者の評価を気にするようになり、飾らない本当の自分を出せないのであろう。叱る、褒めるという幼児を評価するやり方ではなく、例えば前記のブロックの分配で考察したように、具体的な場面において事実や推測を保育者が言葉で説明しながら幼児と一緒に考えていくような丁寧な指導が必要といえよう。

### 引用文献

- 丸山良平 2007 保育園0・1歳クラス児の仲間関係と保育者援助の実態 上越教育大学研究紀要, 26, 331-343  
 丸山良平 2008 保育園女児ミホの他児とのかかわりと保育者援助の実態 上越教育大学研究紀要, 27, 33-42  
 汐見稔幸 1997 ほめない子育て 栄光教育文化研究所

### 付 記

研究にご協力をいただきました保育園の先生方、園児のみなさんに心より感謝いたします。なお本研究は平成17・18年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)(2)課題番号17530470の援助を受けてなされた研究の一部である。

# Infant Peer Relationships and Support from Nurses in Three-Year-Old Class at Nursery School : A Case Study of “Miho”, a Female Infant

Ryohei MARUYAMA \*

## ABSTRACT

The purpose of this study was to clarify the features of Miho's relationships and the support provided by children's nurses in a nursery school. Miho was an assumed name.

Our participants were Miho, children associated with Miho and several children's nurses in a nursery school in Niigata City. We observed Miho's interaction with children and nurses' activities through participative observation for eight months from August 2007 to March 2008, and observed them fourteen times in total.

We analyzed cases from those observations. In this paper we describe the content of Miho's play and her interaction with children, consider features of Miho's relationships and support of children's nurses.

---

\* School Education